

Title	昭和三十年度史學科秋季見學旅行記
Sub Title	
Author	小野, 茂(Ono, Shigeru)
Publisher	三田史学会
Publication year	1956
Jtitle	史学 Vol.28, No.3/4 (1956. 3) ,p.168(446)- 174(452)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19560300-0168

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

月光二菩薩の立像であつて、いずれも鼻目口唇の造作は刀法鋭く深く、中尊の衣文には鬪波式の名残をとどめるなど、様式上藤原初期のものであろう。しかし、その鬪波式は意欲的量の特質を缺き、また峻嚴な相好はあどけなくも感ぜられる。顔面等の小部分を除いては、全體鑿目を荒く横縞に残した所謂鈍彫りである。淺子先生の詳細な御説明によれば、この鈍彫の像は主として關東以北に分布するものであり、これが一つの完成された彫像であるか、或は木彫の工程中のいわゆる荒彫の段階にあるものか未だ論議の定まらぬところであるとのことである。そこには何か都會的洗練とは異つた東國人の野性的な技巧といったものが働いているようにも思われた。さて厨子の兩側の須彌壇には優雅な日光月光兩菩薩の立像及び重厚な四天王、そして漆箔の金色さびた丈六の阿彌陀・藥師が配置され、その前に等身の十二神將が並んでゐる。一堂中に平安から鎌倉にかけての佛像がうち並ぶさまはまさに壯觀というべく、關東には他に例のないことであらう。この他堂の隅に風化して輪廓もおぼろげな木像の破片が幾つか横たえられていた。尙境内の鐘樓には曆應三年(1340)の銘文のある銅鐘が存し、そこに「勸請十二神將」とみえるのは現在の十二神將を指すものであらうといわれている。そのすぐ下に白い躑躅が靜かに咲いていた。こうして私たちは一日の有意義な見學旅行を終えたのである。

(志水正司記)

昭和三十年年度史學科秋季見學旅行記

昭和三十年年度史學科秋季見學旅行は伊木先生を始め、淺子教授、竹田、清水兩助教の指導の下に十月六日から四日間に行われ、信濃路に行われた。今年は昨年の山陰地方とは大分趣が違つたため學生の参加も多く、六十名に達する程であつた。

十月六日 雨

日程の最初は信濃國分寺の見學であつたが、夜半から降り出した雨は朝になつても止まず上田丸子電鐵八日堂驛から泥道の中を金堂跡を左に見ながらその後方稍小高い丘の上にある現在の國分寺境内に向つた。國分寺は云うまでもなく天平十三年聖武天皇の勅により國毎に建立したものであるが、信濃國分寺は天慶の亂に全焼しその後現在の地に移されたが戰國の兵火にかかり、面影を傳えているのは三重塔のみである。本堂は江戸時代の再建であるが、荒れはてゝ見るべくもない。三重塔は室町時代のもので三間三層、屋根檜皮葺様の銅板葺、料拱は三平先、軒二重繁樞、上に相輪が立ててある。外觀は和様風であるが料拱、初層内部等を見ると唐様の影響が強く現れている。ここで土地の古建築に造詣の深い山浦政氏の紹介を受け、これから先、色々と案内や説明を願う事になつた。金堂跡は來た道の傍にあり、僅に創建當時の礎石

によつて當時の規模を察するのみである。尙ここから出土する巴瓦には東大寺のそれと同一形式のものがある。次の目的地上田城は市の西北にあり上田驛より眞田行電車で四、五分、公園下で下車し急な階段を昇るとすぐ目の前が城趾である。天正十一年に眞田昌幸が築城したもので、現在では城櫓三棟と眞田七不思議の一つと云われている巨大な石垣、壕の一部を残し他は公園となつてゐる。この城はその築城方法が一般の概念と異り、東西五十間ブク正方形を土壁で圍み、七ヶ所に櫓をつけて、この全體を本丸と稱していた。この様に本丸のあり方が在來のものとはちがつていたため、城主は本丸には住まず、自分の屋敷から本丸に出向くと云う形をとつていた様である。又現在徴古館と云われている建物は七つの城櫓のうち残つてゐる三つを指している。ここは民俗館、藩政資料室、考古館に分かれてゐる。これより別所に向う。常樂寺は別所驛より二十分程行つた所にあり、境内の左約一町程登つた所にある石造多寶塔が廣く知られてゐる。この塔は銘により弘長二年（一二六二）の建立と推定され、高さ九尺余の非常に落着いた感じのする塔で、屋根の反りや軒付等の垂直刻様は鎌倉時代の手法を傳へ重要な文化財に指定されてゐる。尙同行の山浦氏の説明によると立塔の意義は金銀泥で書いた如法經の一部を納めた納経堂ださうである。又常樂寺には江戸時代の古文書が若干あるが、家康自筆の日課念佛は注目すべきものである。ここには

そのほか古瓦が若干陳列されてゐた。

安樂寺は常樂寺から山道傳いに三、四百米程行つた所でこれも寺そのものよりも八角三重塔として知られてゐる。塔は本堂の裏にある。山浦氏の説明によると以前は八角四重塔として國寶に指定されていたのであつたが、解體修理の際に、今迄初重屋根としていた所を裳階として三重塔として指定された。これにより八角を八識に、四重を四諦智としていた立塔の意味が消えてしまつたのではないかと云う事である。しかし三重か四重か斷定はむづかしく今尙四重塔であると云つてゐる人も少くない。裳階の材栱は簡單であるが上の三重は三手先の詰組で、唐様手法の典型的な建築である。軒は扇檼で屋根は柿葺で最上層の急勾配の上に相輪が立つてゐる。内陣も唐様で室町初期の建築である。

本堂にある木造の開山惟仙、二世惠仁兩和尚坐像も鎌倉期の寫生像の代表的なものであり、嘉曆四年の墨書銘がある。開山和尚の像は國立博物館に展中で見ることが出来なかつた。

十月七日 晴

昨日の雨も上がり、次第に晴れ模様となつて來たために、予定通り三組に分かれて大法寺、中禪寺、生島生足神社を見學する事にした。

大法寺は小縣郡浦里村當郷にあり、三組中最も距離があるために早目に宿を出發した。山越えのために足もとは悪かつたが鄙び

た田舎道の風物はそれを補つてあまりあつた。松本街道を越える
と間もなく目的地に着く。

俗に見返りの塔と云われ、その均整のとれた美をもつて知られて
いるこの塔は、三間三層、屋根檜皮葺、料拱和様で初層は二
手先、二三層は三手先で鎌倉時代のものと思われる。外部各層の
均衡、連子窓、料拱、臺股、内部外陣は小組格天井、内陣の折上
小組格天井等非常に精巧で且つ均齊がとれている。大正九年修理
の際發見された飾斗裏の墨書銘により正慶二年(一三三三)に大
工天王寺流四郎兵衛により造られた事が判つた。この塔の下にあ
る瑠璃殿の厨子は鎌倉から南北朝にかけてのものと思われる純唐
様の見事なもので、強い軒の反りを持つ方一間、入母屋の小建築
であるが、扇檼の軒とそれを支えている詰組料拱は類のない美し
さである。向この大棟の兩端に乗る鯨は現存最古のものとして推定さ
れている。厨子、須彌壇共に重要文化財に指定されている。又厨
子の中にある十一面觀音立像は一木造で、隱やかな顔立、なだら
かな肩、腰の線や裾は藤原前期の様式を示し、國寶に指定されて
いる。この脇侍の普賢菩薩立像は本堂に安置されて居り、そのほ
か大工四郎兵衛尉光宗の銘ある鰐口(重要文化財)、三重塔の水
煙が置かれていた。(小野茂記)

生島足島神社はその名の示す通り、生島神、足島神を祭り、延
喜式には名神大社に列せられている古社である。古文書を多く藏

しているので以下主として當社所藏の古文書につき述べたい。

當社所藏の古文書は、戰國時代の武田氏關係の起請文が中心
で、これに加うるに慶長年間の眞田家の文書がある。即ち永祿二
年九月一日附の武田信玄の願文は、長尾景虎の軍を破る事が出来
れば、當社に十ヶ年間、有錢拾緡を寄進せん、と祈願したもの
で、古くから信玄自筆の願文として名高いものである。

天文廿二年八月十四日附 武田氏安堵狀、折紙 は當社に藏す
る最古の文書である。外慶長六年八月十一日附、同じく十三年六
月十三日附 の眞田昌幸寄進狀 等がある。

次に起請文に就いて記すと、現在八十三通が所藏され、永祿九
年、同十年の兩年のものに限られ、これ等に署名している武將の
數は二百十九名に及んでいと云う。起請文の神文は牛王寶印と
云う特別に神聖な紙を用いる。これを前書の紙に貼り繼ぐ(起請
繼)もので、各地の神社佛閣から發行され頒布されるが、特に紀
州熊野權現のものは多く用いられ有名である。當社の起請文も
又、この熊野權現の牛王寶印を用いている。この紙は本來、裏面
を用いるのであるが、この例に依らないものも若干見受けられ
る。即ち永祿十年八月七日附、六郎次郎信豐の起請文同日附、萩
原民部定久外五名連署の起請文、永祿十年八月八日附の赤須二郎
三郎頼泰起請文の三通はいづれも那智瀧寶印一枚の表に書かれて
いる。又同じく永祿十年八月七日附の小原被官平介外七名連署

起請文は、前書、神文共に那智瀧寶印三枚の表に書いてある。この様に牛王寶印が數枚に亙り、皆表に書いた例は他に類がない。

又永祿十年八月七日附の海野伊勢守幸忠、同平八郎信盛連署の起請文は那智瀧寶印二枚を用いているが、一枚目は表に、一枚は裏に書いてある。更に裏返しにして、しかも倒にして用いたものに、永祿十年八月七日附、馬場小太郎信盈外六名連署の起請文があり、これ等はいづれも珍らしいものである。

起請文は本來、起請者自身を書くものであるが、同一の筆になると考えられるものが見受けられる所から、自筆に依らず、他人に書いてもらい、署名もしくは花押のみを本人が書いたものと考えられるものもあつた。

斯様に當社所藏の起請文は、數に於いて八十三通の多きを數える外、料紙使用上、例外に屬するものが、多く存し、伊木先生の懇切な御指導により、起請文とは如何なるものであるか、その性質、料紙等につき、充分知る事が出來たのは誠に大きな収獲と云わねばならない。

(高橋正彦記)

午後からは松代町に向い、象山神社、海津城址、長國寺、典厩寺などを見學した。

松代町は、千曲川、犀川を隔てて長野市と相對し、今日では人口一萬余の小都市であるが、嘗ては信濃第一の大藩、眞田十萬石

の城下町として隆盛を極めた所である。象山口と云う小さな驛より十分程、侍屋敷の土塀が昔の面影をしのばせている町中マチナカを行き、象山神社に至る。ここは町の西郊に當る象山の麓、有樂町にあり、境内は靜かで落着いた雰圍氣に包まれていた。この神社はその名の如く、佐久間象山を祀つてをり、象山に關する文書類を見るのが目的である。文書、書簡等を數通見たが、特別に目新しいものはなかつた。

海津城址。一名川中島城とも云う通り、前方に川中島を控え、背後三方を山で圍まれた天然の要害で、天文二二年（一五五二）武田信玄が上杉氏に備えるために、山本勘助に命じて創らせたもので、その後改築を重ねて、日本七城の一つに數えられるに至つた。今日では往時の面影を止めるものはなく、僅かに本丸址とおぼしきものが認められる程度で、城内は遊園地になつてゐるが、前日見學した上田城と較べると、その規模は著るしく小さい。長國寺に行く途中、象山が日本最初の電信の實驗を行なつたと云われている、電信塔跡を見る。塔と云うよりもむしろ樓と云うべきもので、上迄登つた者の話によると、荒れてはいるが眺めは良いと云う事である。

眞田十萬石の菩提寺である長國寺は、町の北にあり、三門を入つた正面、本堂の屋根、鯨の下には六文錢が左右に並んでいる。墓地は本堂の裏にあり、土塀で圍まれた境内に、三間四面の入母

屋、正面に千鳥破風を配した堂と、四面四面、屋根寶形、向拜附の堂が並び、十萬石の昔をしのばせる豪華な内部には、眞田家累代の位牌が安置されていた。これより川中島にある典厩寺に向う。ここは信玄の弟、武田典厩信繁が葬られている所である。信繁の墓以外には注目すべきものは無かつた。

十月八日 晴

三日目の予定は善光寺と松本城である。善光寺は、種々の縁起によると、皇極天皇の時代に創建されたと伝えられ、現在では大勸進(天台宗)と大本願(浄土宗)との二つから成っている。本尊は、欽明天皇十三年百濟國聖明王から、經卷と共に持ち來られた一光三尊佛阿彌陀如來で、七堂伽藍の完成したのは、白雉五年(六五四)と伝えられているが、その後十一回の災厄にあり、現在の本堂は、寶永四年(一七〇七)、建立になるものであり、國寶になつている。次にこれを見學の順序に従つて述べて行く。

大本願は仕王門の兩側にあり、本誓殿、奥書院、明照殿、光明閣、寶物館から成り、寶物館にある一茶の短冊數首が注目を引いた。次が山門の西にある大勸進で、萬善堂、無量壽殿、厄除不動、寶物館、紫雲閣を具え、無量壽殿には阿彌陀如來及び脇侍が安置されていた。文書は武田信玄書狀、天海和尚書狀各一通が特記すべきものである。

本堂は、寶永年間に完成したもので、梁間七間、桁行十六間の

重層、屋根檜木造、檜皮葺で、高さ十四間余、柱數百八本と云う大伽藍で、杵拱和様、正面千鳥破風の下に、軒唐破風の向拜を配した江戸時代に於ける神社建築の傑作である。内々陣と内陣との間にある、大面取角柱が存在している事は、大社造の名残りと思われる。内陣からは常に讀經の聲が洩れ、信者が次々と集つて來る様を見ると、信仰の力をつくづく感じさせる。これより戒壇めぐりを行う。これは本尊を安置してある瑠璃壇を一週する事であり、眞暗な中を手探ぐりで進み“お鍵”に觸れて、御本尊と血縁を結んで出て來ると云うわけである。歩く距離は長くないのであるが、暗いために非常に長く感じられ、鍵に觸れると、安堵に似た感が起るのは面白い心理である。本堂を出てからは聖牛、世尊院の金銅釋迦涅槃像を見る。涅槃像は長さ一米余鎌倉末の製作になるものである。

これより長野を後にして松本に向う。車中より眺めた松本平の美しさは印象的であり、冠着驛でもらつた花束は我々の旅行に一つの愉快な思出を加える事になつた。

松本は、丁度松本城落成記念の祝祭日に當つていたため、城内外は小、中學生の團體、一般參觀者で、満員の盛況であつたので、ここで一應解散して各自に見學する事にした。まず城を見る前に、城の脇にある松本市立博物館で行われていた、松本城資料展を見學して、あらかじめ知識を得る事にした。

松本城は永正元年（一五〇四）に、島立右近大夫貞永により築造され、當時は深志城と云つた。當時の規模は、現在の本丸と二の丸の内にあり、館程度の建築ではあつたが、從來の山城から、平城に移る過渡期的な存在である。この後、小笠原、武田、木曾、小笠原と城主が移り、天正七年、小笠原氏の手により再歸した時に、松本城と改め、文祿三年（一五九四）、石川光長の時に五層天主閣を造り、其後寶永年間に濱平直政が、辰巳附櫓、月見櫓を建てて、現在の規模を見るに至つた。五層、内部六階の本天守は、二階づつ構架した三重構架式で、内部を見た人は氣が附いた事と思うが、大黒柱を用いてないのが特徴である。中に入ると、初層の石落しに城廓建築の古式を踏襲しているのが見られ、鐵砲狭間、矢狹間等も具えてあり、乾小天守一階、辰巳附櫓、月見櫓迄も見ることが出来た。月見櫓には、舞良戸を用いてあり、花頭窓を設け、勾欄附の廻縁を三方に具えている所などが、城廓建築にそぐわぬ趣を呈していた。

尙この城の近く、本町には明治時代に於ける洋風建築の最古の遺構として有名な、開智小學校があり、若干名が歸途に立寄つた。土蔵造りの二階建は重々しい明治の匂を傳えてはいるが、當時の文化遺産として、高い価値を持つてゐる。

十月九日 晴

旅程の最後は、諏訪の上、下社見學である。前夜一泊した舊本

陣の龜屋は、下社秋宮と相接した所にあり、上諏訪と較べると、より靜かで、ひなびた感じのする所が魅力的である。

一般に諏訪大社と云う時には、上、下社を含んでいるのであるが、共に本殿を有しない神社建築の珍しい例である。下社は春宮、秋宮の二つに分かれ、祭神八坂刀賣命が、一年の上半期を春宮に、下半期を秋宮に過すと云う傳えがあり、毎年八月一日に「御船祭」があり、この時に春宮から秋宮に神輿が渡るのである。尙遷座祭は二月一日に行われる。春宮は特別に見る物もないので、以下秋宮の寶物殿について、若干記して置く。この寶物殿で最も知られているのは、鎌倉初期、忠吉銘のある太刀と、宇治川先陣争いの時、佐々木高綱が使つたと云われている「綱切太刀」の二口で、いずれも國寶となつてゐる。又文書では源頼朝下文がある。これには前石大將家政所下文とあり、建久二年二月二十一日附のもので、注目すべきものである。頼朝は建久元年十一月に、三位大納言に任ぜられ、同時に左近衛大將にも任ぜられてゐる。そして翌二年正月公卿並に政所を開き、政所下文を發してゐるのである。しかも頼朝は右大將に任ぜられた翌月には、これを辭退してゐるので、諏訪神社下社にある下文は、今日残る政所下文としては、最古のものと斷定してよいのである。同じく文書に、後奈良天皇女房奉書一通がある。これは天文九年、厄病流行の際、天皇が各國に般若心經の御宸筆を賜つた折の、女房の奉書であ

る。しかし今日では、般若心經は傳つていない。そのほか、考古學的遺物として、縄文式土器、石器、瓦等が多數陳列されていた。

上社は、諏訪郡中洲村にあり、全國に分社四千八百余を持ち、祭神は建御名方命で、大國主命の子、國譲りの後出雲より移り、洲羽の地を開いたと傳えられている。拜殿に通ずる道は、渡廊下の如くなつて居り、渡り切ると左側が神社の鳥居になつて居る。拜殿の位置が、渡廊下と丁度百八十度即ち、參拜者が、來た方向に向き直る所にあるのも珍らしい。これは元和三年(一六一七)諏訪神社上社の神前に建立されたものである。本社は本殿が無いために、拜殿と階段で連續されている幣殿により構成されている。

拜殿は方一間の向唐破風造で、檼は二重吹寄屋根柿葺で、軒の支えには唐様三ツ斗を用い、内部は折上小組格天井で、壁は彫刻で填まり、小規模ではあるが、豪華で豊麗の趣を呈している。幣殿の作りも拜殿とほとんど變らず、いづれも昭和十三年焼失以後の再建になるものであるが、桃山時代の華麗な趣がよく現されている。伊勢神宮に慣い、七年に一度御寶殿のみ造營し、これが次第に形式化して、七年に一度づつ上下四社(上社の本宮、前宮、下社の春、秋宮)の神殿の四隅に大丸太を建てる行事に變つて來た。

上社の前宮は本宮より二軒程離れた宮川村にあるが、全く荒廢して訪ずれる人もなく、四隅の柱のみが印象に残つた。かくて前後四日に互つた見學旅行も無事終了し、午後四時頃、上諏訪にて解散した。

尚、今回の見學旅行に當り、種々便宜を與えられた諸々の社寺その他の當事者の方々、主として建築について懇切に指導して下さつた山浦政氏、直接引率指導に當られた伊木先生を始め、淺子教授、竹田、清水兩助教授には厚く感謝する次第である。

(小野茂記)